

大黒屋光太夫記念館だより

第7号/2009年2月発行



新発見の光太夫の墨書が寄贈されました！

大黒屋光太夫のロシア文字による墨書は、「ツル」「カメ」などおめでたい言葉がロシアの文字で書かれています。当館でもこれまで企画展などで何回か紹介してまいりましたので、ご存知の方も多いと思います。

今回発見された墨書は、「ツル」と書かれており、サインは「イセ・ダイ・コー」。ふくさに書かれているという点では、他に類例がありません。

発見・寄贈して下さったのは、玉垣地区にご在住の川出和彦さんです。

川出さんのお父様は、鈴鹿市の初代収入役・2代目の助役などを務められた地元の名士でした。今回、お父様の遺品を受けついでお姉様の遺品を整理されていて、この墨書を発見されたそうです。川出さんは、光太夫の墨書を本でご覧になったことがあり、このふくさを開いた瞬間、「光太夫のものかもしれない」と気がついたそうです。その時、気づいていただかなければ、日の目を見ることはなかったかもしれません。

川出さんのお住まいの玉垣地区は、光太夫の母の実家があった地区でもあります。光太夫は、帰国から10年後に里帰りをした際、玉垣村に戻っていた母を訪ねています。

光太夫と無縁ではない玉垣地区から発見されたこのふくさは、現在展示中です。



川岸市長から感謝状を手渡される川出さん
(鈴鹿市庁舎市長応接室で)

第4回特別展

光太夫 船出の湊－白子大絵図でめぐる－

会期：平成21年2月11日（祝・水）～5月10日（日）



白子大絵図（全体）

今回の特別展では、大黒屋光太夫が船出した湊「白子」を取り上げます。

白子がかつて、木綿荷物を中心に江戸上方間の物流の拠点として栄えた湊でした。白子本町（旧東町）には、積荷問屋・廻船問屋の建物が軒を連ね、裕福な商人を中心に華やかな文化が育まれました。今に残る祭礼行事の豪華さからも、当時の白子の活況が窺えます。

今回、展示している白子大絵図は、一見家から玉崎家が預かり、白子郷土史会が譲り受け、市に寄贈されたものです。縦4m×横4mというこの巨大な絵図は、100枚ほどの紙が継いであり、それらがバラバラに外れてしまっている状態で、今まで公開することができませんでした。今回、この特別展の開催にあたって修復をし、皆さまに見ていただくことができるようになりました。

☆大黒屋光太夫と白子

大黒屋光太夫は、白子の廻船問屋・一見勘右衛門の所有する神昌丸という船に雇われて乗る船頭でした。白子は、神昌丸のような千石船が何十艘も所属するとても栄えた湊でした。光太夫は帰国後、「勢州白子大黒屋光太夫」とサインすることも少なくありませんでした。

☆白子の船着き松

白子の積荷問屋・竹口家の庭には大松があり、船着き松と呼ばれていました。かつて白子には、林昌寺の大松（火事で焼失）と御殿の福德松の3本の大松がありました。特に、竹口家の船着き松と林昌寺の松は、この2本が一直線に見える位置を目指して船が湊に入ってきたそうです。

☆ちょっと昔の白子

今回の特別展では、昭和20～40年代の白子周辺の写真も展示しています。写真を撮影したのは江島出身の故・長谷川勇さんです。長谷川さんは、当時の何気ない生活の風景などを写真に残してくださいました。今となっては貴重な記録です。



大宝殿絵馬（江島若宮八幡神社蔵）



船着き松と竹口家の人々

❀大黒屋光太夫が紹介されました❀

◎『全集 日本の歴史 12 開国への道』平川新著 小学館 2008年11月刊行

2400円 ISBN978-4-09-622112-9 C1321

★口絵で当館所蔵の「漂流人帰国松前堅之図并異国人相形図」が紹介されました。

☆大黒屋光太夫についても、斬新な視点から詳しく紹介されています。文章もとても読みやすく、内容も充実しており、光太夫とその時代について知ることができます。

◎キリンビバレッジのHP内「キリンビバレッジの紅茶文化」
(http://www.beverage.co.jp/about_tea/tale_of_tea/tale/story6a.html)

★大黒屋光太夫と紅茶について触れられています。当館所蔵の「漂流人帰国松前堅之図并異国人相形図」が掲載されています。

◎「その時歴史が動いた」カレンダー

先年 NHK の番組「その時歴史は動いた」で大黒屋光太夫の帰国が紹介されました。2009年のカレンダーには、光太夫の言葉が収載されています。



その他、数社から掲載依頼がありました。

❀若松小学校4年生が見学に来てくれました！❀



地域学習で大黒屋光太夫のことを勉強している若松小学校の4年生が記念館を見学に来てくれました。

若松が生んだ大黒屋光太夫について、お話をきいたあとに展示を見てプリントを完成させました。そして、たくさん質問をしてくれました。

大黒屋光太夫記念館では、小学生用のプリントを用意して、みなさんをお待ちしています。プリントができれば、「こうだゆう君シール」をプレゼントします。

あしえて！こうだゆうくん！！ 第2回

質問：光太夫のお墓を見に行きたいのですが、どこにあるのですか？

答え：大黒屋光太夫は、文政11（1828）年に江戸で78歳の生涯を閉じ、江戸本郷の興安寺に葬られました。磯吉も天保9（1838）に77歳で亡くなり、同じく興安寺に葬られました。興安寺は現在もありますが、光太夫・磯吉のお墓は残っていないそうです。

また、鈴鹿には、神昌丸が行方不明になって2年後に、荷主だった長谷川家が中心となって建てたお墓（供養碑・市指定文化財）が残っています。記念館から歩いて20分（1.5km程）ですので、是非記念館と一緒に訪れてみてください。

興安寺：東京都文京区本郷1-8-18 供養碑：鈴鹿市若松東1丁目山中墓地（マップあります）



記念館からのお知らせ

* 白子屋台行事が開催されます。

特別展「光太夫船出の湊 - 白子大絵図でめぐる -」でも紹介させていただいている白子屋台行事が、今年は4月11・12日に開催されます。今年は、修復された東町の屋台が久しぶりに勝速日神社に曳き入れされます。なお、今回の特別展で展示中の白子屋台行事見送り幕（東町所蔵）は、祭礼期間中は一時返却されます。絢爛豪華に飾られた4台の屋台が見られるのはこの日だけですので、是非お出かけください。

* 今年桂川甫周の没後 200 年にあたります。

大黒屋光太夫からロシアの事情を聞き取り、外国の地理学書と照合して「北槎聞略」を編纂した桂川甫周。「漂民御覧之記」も彼の著作です。

甫周は、杉田玄白の『解体新書』の翻訳にも携わった蘭学者で、安永4(1775)年には、ツェンベリーから生物標本を学び、幕府の医学館教授などを務めました。杉田玄白所蔵のヨハン・ヒュブネル『ゼオガラヒ（新古地理問答）』6冊本を元に「地球全図」を編纂するなど、世界地理にも強い関心を示しました。帰国後の大黒屋光太夫を語る上で欠かすことのできない人物です。

大黒屋光太夫記念館では、今後、広く桂川甫周の功績を知っていただけるよう展示等も企画していきたいと思っています。

事業報告

* 平成20年度(4月～12月) 展示室入館者数

入館者数 2641人 開館日数 190日 開館時間 10:00～16:00 平均 13.9人/日

* 展示活動 平成20年4月～平成21年2月 企画展「北槎聞略でたどる光太夫の旅」

平成21年2月～ 第4回特別展「光太夫 船出の湊-白子大絵図でめぐる-」

* 出版物 第4回特別展「光太夫 船出の湊-白子大絵図でめぐる-」図録

* 主な来館者(敬称略) 鈴鹿サイクリング協会・玉垣老人会・文化財探訪セミナー

牧田公民館・日本大学国際交流学科・久居中央公民館・多気町郷土史教室

浜松中日文化センター・鈴鹿市民歩こう会・近鉄ハイキングなど

編集後記

2月11日から4回目の特別展「光太夫船出の湊 - 白子大絵図でめぐる-」が始まりました。今回の特別展は、白子大絵図が4m×4mという巨大なものであるため、展示するのが一苦勞でした。鉄のパイプを中性紙のロールで保護して演示具とし、それに絵図の上方を巻いて吊るしました。絵図が落ちてこないように安全に固定するために、綿と和紙で作った布団を緩衝材にして大きな洗濯バサミのようなもので留めました。そして、下方の白子の町の部分をよく見ていただくために、ケースの床にその部分を広げるような形で展示しました。今回の展示は、職員が知恵を出し合って工夫しながら行った手作りの展示です。沢山の地元の人に見ていただいて、私たちが住む地域の歴史や文化を見つめ直す機会にして頂ければ幸いです。